

海外に学ぶアクティブシニアの住まい

第1回 リタイアメント・コミュニティ

～ハッピーリタイア生活を満喫する街～



三菱総合研究所 プラチナ社会研究センター
松田智生主任研究員

慶應義塾大学法学部卒業。1991年三菱総研入社。専門は新産業創造、組織活性化。2010年新たな政策提言プロジェクト「プラチナ社会研究会」立ち上げ。シルバーよりも上質なプラチナ社会・産業像を研究。

1960年代米国でスタート

◇定年後10万時間の過ごし方

定年した後、自分の自由時間はどれだけあるか？

1日24時間のうち睡眠や食事の時間を引くと約14時間、定年後20年分の自由時間は14時間×365日×20年間＝10万2200時間、約10万時間にもなる。

充実した老後はこの10万時間の過ごし方にかかっている。

しかし、最近は無縁社会という言葉に象徴されるように、住宅街は昼間でも2階の雨戸が閉まったままの家が多く、そのほとんどは

◇定年後10万時間の過ごし方

無縁社会は見守りや医療介護など行政コストの負担増につながる、また消費活動の低下で地域経済も活性化しない。高齢者が元気に暮らすことは社会問題だけでなく経済面からも日本にとって急務の課題なのだ。

ゆえに暮らしの根幹である住まい方が重要になってくる。

◇リタイアメント・コミュニティという住まい方

老後を元気で充実させたいという思いは日本も海外も同じだ。米国では高齢者の快

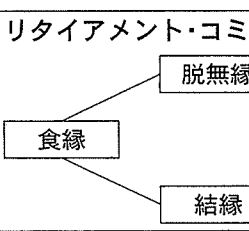
適な暮らしを実現する方策として、1960年代からリタイアメント・コミュニティと呼ばれる街づくりが始まった。これは安心してハッピー・リタイア生活を送れるように、入居条件を原則55歳以上として、住居、娯楽、医療、生活サービスが整備されたアクティブシニアのための街であり、主としてカリフォルニア、アリゾナ、フロリダといった温暖な

気候の土地で開発されている。

ほとんどのコミュニティにはゴルフ場が隣接され、米国人の夢である「ゴルフ三昧」の日々が楽しめるようになっていく。

なお入居条件が55歳以上なのは治安の視点がある。高齢者を狙った犯罪や若者の喧騒を考慮し、街はゲートで囲われ安全が重視されている。

リタイアメント・コミュニティの先駆けとして有名なのが、アリゾナ州のサンシティだ。温暖な気候の約3,000haの敷地に3万人以上のシニアが居住し、10のゴルフ場、20のショッピングセンター、劇場、教会、ホテル、レストラン、病院など全ての機能が備わった巨大な街で、住民はあらゆるレクリエーションが満喫できる。



活動も盛んで、住民自身が福祉や警備や公共施設の管理を行い、元医者・看護婦・税理士がそれぞれのキャリアを活かして地域社会に貢献する。これはボランティア活動を通じて街の運営に係わり、誰かのために働き、そして頼りにされる生きがいにつながっている。

◇コミュニティで生まれる新たな縁

・知縁・結縁
リタイアメント・コミュニティでは、居住者同士の新たな縁が生まれる。

①食縁：一緒に食事をするつながり。
高齢者にとって独りきりの食事ほどさびしいものはない。「誰かと一緒に夕食を食べるのが楽しみ」という居住者の言葉のように食事によるつながりができる。

②知縁：知的刺激を通じたつながり。

近隣の大学の生涯学習講座で、歴史や文学分野を学ぶことで、知的な生きがいと共に一緒に学ぶ仲間とのつながりができる。

③結縁：触れ合いやITによる遠隔医療

同じライフスタイルの居住者同士で趣味を通じた喜びの共有やボランティアによる地域社会とのつながり、またITによる遠隔医療・見守り機能による結びつきも得られる。

この連載では、米国のリタイアメント・コミュニティを中心に、施設概要、運営のノウハウ、ビジネス化、そして元気シニアの生の声やライフスタイルを紹介していきたい。

高齢化社会をピンチでなくいかにチャンスにするか、海外のアクティブシニアから学ぶことは大きいはずだ。